
魅月町・夢想の鳥

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅月町・夢想の鳥

【Nコード】

N2459D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

わんぱく小学生の弓場孝太郎と、その親友神代才輝、そして超い加減な教師・有田の騒がしい日常。 ”町” 自身が語る現代ドラマシリーズ・その2。

プロローグ・ごあいさつ

あ、あゝ……オホン。ただ今マイクのテスト中……。という下らない冗談はさておいて、お久しぶり、あるいは初めまして。私の名前は魅月町。みつきちょう、と読む。すでに知っておられる方もおいでだろうが、改めて自己紹介させてもらおう。

魅月町 九州の中ほどにある地方都市。西の太平洋と東の山に挟まれており、割と自然が豊かな町だ。温暖な気候で、冬でも雪は降らない。主な収入は観光と農業。町の中心部には小中学校が2校ずつ、高校、大学が1校ずつ存在する。いずれも県立だ。

以前私は【針葉の花】というストーリーを皆さんにお話した。そして今こうしてお会いできたことの記念に、もう一つ別のお話を紹介しようと思う。

……なに、前の話を知らなくても問題はない。舞台は同じこの魅月町だが、登場人物やストーリーは全く別物だ。

タイトルは……【むねづきの夢想の鳥トリ】

さあ、ご覧あれ！

第1章・高鳴り（前書き）

弓場 孝太郎（ゆんば こうたろう）

12歳・小学6年

絵に描いたような野球少年。希望ポジションはピッチャーだが、制球力がめちゃくちゃなため外野をやらされている。

会話を聞いて分かる通り、孝太郎は大の野球好きだ。

「確かに……。せいぜいスポーツニュースぐらいだな。見れるのは」

「ちつくしよおお〜とびて〜！ アメリカにとんで生で見えよ〜！」

その時、キンコーン、カーンコーンと、チャイムがなる。昼休みの終わりを告げるチャイムだ。

「ほら、掃除の時間だ。オレは校庭掃除だから先に行くぞ」

「う〜……」

才輝は、孝太郎とは対照的に冷静で大人びた性格だ。顔つきもよく、女子によくモテる。そんな彼が感情優先の孝太郎と仲良くしてられるのは、傍から見ると奇異に見えるが、当の才輝本人はけっこう楽しんでいたりする。

孝太郎と才輝。これにもう一人加えたトリオが、この物語の主人公である。

午後の掃除と授業が終わり、HRを始めるために日直が担任の教師を呼びに行っている。その間も、孝太郎は悲しみにくれていた。（さすがに教室で泣いてはいなかったが）机に伏せてうなだれる孝太郎の頭を、誰かが叩く。

「んあ……？」

孝太郎が顔をあげると、同じクラスの井原^{いはら}美春^{みはる} だった。

「美春……？ なに……？」

「なに、じゃないでしょ！ なんで掃除に来なかったのよ！」

美春は気が強い女の子で、孝太郎と同じ教室掃除担当だ。

「掃除どころじゃなかったんだ……うるさいなあ……」

「なによ、その言い方！ 全然反省してないじゃない！」

「……孝太郎、お前まだ悲しんでたのか」

孝太郎の劣勢を見て、才輝が援護に入る。

「悲しむって、なにがあつたの？」

才輝が出てきたので、他の女子も話題に入ってくる。

「コイツは、大事な人が遠くに行ってしまうって悲しんでたんだ」

「へえ……」

数人の女子が同情と好奇の目で孝太郎を見る。が、美春は騙され
ない。

「そんなの、掃除をサボる理由にならないわ。……どうせロクな人
じゃないでしょ、あんたの大事な人なんて。」

「なに……?」

孝太郎が立ち上がって美春を睨む。

「バカにすんなよ！ 男のあこがれを！」

「なによ、あたしより背が低いくせに！」

(はじまった……)

こうなると、才輝でも手がつけられない。

「お前が高すぎるんだよ！ オトコオンナ！」

「どごがよ！ ちゃんとした女の子でしょ！」

「へ〜そうです……かぁ！」

「キヤア!?!」

孝太郎は勢いよく美春のスカートをめくった。

「このバカ！」バシッ！

美春が顔を真っ赤にして拳を振るった。

「いでっ！ グーで殴るか!? 普通……」

「最低！ 変態！」

「いや、いい音したなあ、井原。また威力があがったんじゃないか？」

教室に大人の声が入って来た。

「先生！ 今、弓場くんが……」

「孝太郎、どうせスカートめくるなら、保険の伊藤先生のやってくれないか？ 俺がやったらマズイからな」

このふざけた発言をした教師が、孝太郎たちの担任・有田である。

第2章・否鳴ぎ(前書き)

神代 才輝 (じんだい さいき)

12歳・小学6年

ポジションはサード。名前の由来は、母親いわく「あらゆる面で才能を発揮できるように」だそうだが、「輝」の字の違いから親の学
のたかが知れる。

第2章・否鳴ぎ

「さあ〜て……じっくりお説教してあげますかね」

放課後の職員室。有田は孝太郎と才輝をイスに座らせてニヤリと笑う。

「とりあえず……掃除はやっとけ。律儀にやっとする奴らに迷惑だ」

「はい……」

「と、言いたいところだが……遠藤選手がいなくなったのはツライしなあ……。掃除どころじゃないってのもわかる」

「だ、だろ！ 先生もそう思うだろう！？ やっぱり中継で見たいよな!？」

孝太郎の目が輝く。

「いや、遠藤選手のいたチームが来年も優勝することに、5万円賭けてたんだ。まいったな〜賭けた途端に抜けるなっちゅう話だよ。オレの給料からすれば、5万円なんて大金だぜ？ 負けたら酒飲む金がなくなっちまう」

「は……」

「アイツがいれば次も余裕だと思ってたのによ〜」

「……オホン。有田先生？」

近くにいた別の教師が咳払いをする。

「ま、まあそれは置いといて……」

置くんかい。

「その掃除の前、昼休みに屋上でバカデカイ声を出していたやつがいるんだが……」

「な、なんで俺だつてわかったの!？」

「あ、お前だったのか。まだ誰とは知らなかったのに」

「孝太郎……バカ」

才輝がため息をつく。

「自分でバラすな……」

「わ、悪い、才輝! でも、大声出しちゃいけない、なんて決まりあつたっけ?」

「……大声を出す出さない以前に、屋上は立ち入り禁止だろーが」

「あ! そういえば……」

孝太郎、必死になるほど自滅する小僧である……。

「それとさっきのセクハラ行為。これについてはみっちり説教し

「やらんな」

「次のターゲットは保険の伊藤先生、だっけ？」

孝太郎が反撃に出る。

「……まあ、それも置いて……」

それも置くんかい。

「お前ら、来月隣の野球チームと試合するんだって？」

説教はどうした。説教は。……どうもツッコミが多くなるな……
今回の私は。それぐらいいい加減な教師だ。

「ちゃんと練習やってんのか？」

「そう、それなんだよ先生！」

孝太郎が声を張り上げる。

「俺たち、いつも公園のグラウンドで練習してるんだけどさ、最近
いっつも中学生の人たちが先に使ってて練習できないんだよ」

「ああ？ お前ら学校終わってすぐにグラウンド行ってるんだろ？
何で中学生が小学生のお前らよりも先に来れるんだ？中学生は授
業終わるの遅いだろ」

「学校を自主早退しているんですよ。この間大声でそうしゃべって
いました」

才輝が口をはさむ。

「自主早退って、ようするに学校サボって抜け出してるだけじゃねえか。でも学校サボってでもやるのが野球って……。健全なんだか健全じゃないんだか……」

「健全じゃありませんよ。どう見ても」

「ほう。根拠は？ 見た目だけで判断するなよ？」

「その中学生たちが集まっている場所はグラウンドですけど、やっているのは野球じゃなくてタバコでしたから」

「なるほど。スゲーわかりやすい。さすが才輝」

素直に感心している。

「ねえ先生！ あいつらどうにかしてよ！ あそこが使えないと他に練習するところないよ！ この町狭いんだから！」

狭いとか言うな！ …… 広くはないのは確かだが。

「おいおいおい。オレは小学校の先生で、小学生を世話するのが仕事だ。中学生のことは中学校の先生に頼めってんだ」

「…… 良識のある大人として、未成年の喫煙に関して何も思いませんか？」

「いや、オレも中学生のころからタバコ吸ってたし」

「…………オホン。有田先生…………」

再び咳払いが聞こえる。が、今度の音の発信源は先ほどの教師ではなく、いつの間にか背後にいた校長先生だった。

「有田先生の中学時代の話、校長室でじっくり聞かせていただけませんか？」

「や、やだなあ校長先生。昨日テレビでやってたドラマのマネですよ……………」

（ダメだ、この人…………。）

それが、孝太郎と才輝の共通の感想だった。

第2章・否鳴ぎ（後書き）

サブタイトルは「むやなぎ」と読みます。

第3章・決起（前書き）

有田 衛（ありた まもる）

27歳・小学校教諭

元々は高校の教諭だったが、「性に合う」の理由から転勤。タバコは一時控えていたが、最近また吸い始めた。

第3章・決起

翌日。相変わらず元気のないまま、孝太郎は登校していた。

「弓場君、おはよう」

「あー……おはよ……美春」

「テンション低いわね。大丈夫？」

昨日の剣幕はどこへやら。日が経つとあっという間に忘れ去られるのが子供のケンカである。

「いつまで落ち込んでるのよ。未練がましい」

美春も、普段は親切な女の子である。

「うつせえなあ……」

「なによそれ。せつかく心配してあげてるのに」

「お前なんか心配されたくない……」

「……っのっ……」

……すぐに再発するのも、子供のケンカである。

「井原さん、孝太郎、おはよう」

才輝がタイミングよく現れる。

「あ、神代君、おはよう」

「おはよ……才輝……」

「神代君、コイツどうにかならない？」

そう言っつて美春は孝太郎の頭を小突く。

「無理もないさ。結局昨日もグラウンドが使えなかったしな」

「あの中学生達さえいなけりゃ……ホームランカツ飛ばして少しはストレス発散できるのに……」

「フン。ブツブツ言っつてないで、ガツンとやっつけちゃえばいいのよ。男らしく」

美春が拳を振り上げながら言う。

「そりゃお前みたいに異常な怪力がありゃあそうしてるけどさあ……」

「だれが異常な怪力よ！」

「うっせええ！ あああもうとびてええええええっ！」

キレた。

「……うるさい……」

「ちくしょう！ いいよ、やってやるよ！ 今日、中学生追い払ってやる！」

「ああー、それじゃあ給食を食べる前にひとつ言っておきたいことがある」

4時間目の授業が終わり、給食の時間に有田が教壇に立つ。

「最近、男子の素行が悪いっつー意見が多いので、今日から男子にはあるスローガンを掲げてもらおう」

「スローガン……？」

「ズバリ、『大人になるな、紳士になれ』だ！ どうだ、なかなか渋いだろう」

「意味不明です」

また何かふざけたことをやらかすつもりだ。

「と・に・か・く。いいかあ？ 男子。まず挨拶する時はシルクハットを取って『ごきげんよう』」

「シルクハットなんてもってませーん」

「常に洗いざらしのハンカチーフを持ち歩け」

「ハンカ……え？ 何？」

「そしてテーブルマナーは完璧に」

「先生。とりあえずお手本を見せてください」

「……男ならワイルドに喰え！」

どっちだ。イメージだけで紳士を語るな。

「すみません。結局何がしたいのかよくわからないんですけど」

「おう、そうか。ただの遊びだから本気で考えるな」

最初からだれも本気にしていないが。

「まあ、いいや。そんなじゃいただきまーす」

「いただきまーす」

……このクラスはいつもこんな感じだ。

「……先生」

「ん？ どーした孝太郎」

孝太郎が有田の隣に立つ。いつになく真剣な、思いつめた表情だ。

「オレ、今日中学生たちやつつける」

「そうか、じゃあフェンシングで決闘を申し込め。あるいはボクシ

ングだ」

パンをかじりながら答える。

「マジメに聞いてよ！」

「マジメだっつーの。いいかあ？ まだガキンチョのお前らが中学生とまともにケンカしたって勝てるわけねーだろーが（中学生もまだガキだけど）。ちゃんとしたスポーツだったら、少しは勝ち目があるかもしれねえだろ。少しは」

そこを繰り返すな。

「……なんでフェンシングなの？」

「英国紳士っぽいだろ。なんとなく」

「……もういいよ！」

孝太郎は自分の席に戻って行く。

「……熱いねえ……。まったくガキは熱血で……って熱っ！ 熱い、このスープ、メチャクチャ熱いぞ！？」

ガシャーン。

「あー、先生がスープこぼした！」

この騒ぎに目もくれず、孝太郎は黙々と食べ続けた。

第4章・羽ばたき

その日の午後は2時間とも移動教室で、専門の先生の授業だった。授業が終わって日直が有田を呼びに行く。

しかし、戻ってきた日直と一緒に教室に入ってきたのは、有田ではなかった。

「えーっと、有田先生が急用で帰られたので、私が代わりに帰りのHRをします。」

保険の伊藤先生だった。

「急用って、何の用事ですか？」

「さあ……大学の後輩の演劇に招待された、と言っていましたけど詳しくは……」

そう言って伊藤先生は首をかしげる。

「確か、唾倉浪才の小説をもとにした演劇をやる、と大学生がポスターで宣伝していたな。……しかし、あの有田先生がわざわざ演劇なんか見に行くか……？」

才輝が孝太郎に話しかける。

「知るか、あんなやつのことなんか」

孝太郎はふてくされたまま答える。頭の中は放課後の決闘のことで一杯だった。

「……孝太郎、やっぱりケンカはよせ」

「なんでだよ。今変更しねえよ」

「ようは野球の練習ができればいいんだろ。他の野球クラブのやつらと一緒に、学校の運動場使ってる他のクラブに交渉してみよう。……下手に大騒ぎになって、試合に出られなくなったらどうするんだ」

「……わかったよ。あのダメ教師は役に立たないし……」

放課後、交渉を始めるが、なかなか上手くいかない。グラウンドの半分を独占している女子ソフトボールのキャプテンが美春だということも大きい。が、「野球クラブの活動場所は校外のグラウンド」ということが伝統になっているからでもある。

徐々に過ぎて行く時間に、孝太郎の苛立ちは募る一方だった。

「ここで時間を30分ほど遡り、”ダメ教師”有田を追ってみよう

「かあ〜！ 肩いて〜、腰いて〜まだ20代なのにかなり体がなまっちまってる〜。どれ、もう一球！」

カキーン、とバットが鳴り、白球がネットにささる。

そう、演劇とはただの口実で、有田は例のグラウンドに来ていたのだ。

「どうよ、この見事なスイング。惚れられするぜ」

誰に言ってるんだ。

と、その時、中学生が5、6人グラウンドにやってきた。いずれも一見して「不良」という印象を受ける者ばかりだ。その足もとに、ボールが転がる。

「おい、それ、取ってくれないか？」

有田が中学生たちに手を振る。

「ああ？ 何やってんだ、あのオヤジ」

金髪の生徒が有田を睨む。

「知らねえよ。とりあえず返しとけ」

他の生徒がボールを拾って返す。

「サンキュー。お、いい肩してんな」

有田を無視して、中学生たちはベンチにたむろする。

その中の一人がタバコを出した時、有田が声をかける。

「おい、お前ら。今日は早く帰った方がいいぞ」

「……」

「無視すんなって。じゃないとお前ら、ボコボコにされるぞお？」

「あ………？」

金髪が立ち上がって再び有田を睨む。

「誰がどうなる、だって？ まさかお前が俺らをボコすつもりか？」

「いや、俺じゃない。ただのガキ共だ」

話しながら有田はベンチに近づいて行く。

「ガキってのはキレたらなににするかわからねえからな。早くこのグ
ラウンドから出た方がいいぞ」

この”忠告”を聞いて、仲間内で話し合いが始まる。

「ガキ……。あの、よくこの辺ウロチョロしてる小学生か」

「ああ、俺らがいるのを見てすぐ逃げるやつらだな」

「で、あのオヤジが誰かは知らないが、全く問題ないな」

「小学生にケンカ売られるから逃げろ……ナメてんのか？ オッサ
ン」

最後のセリフは有田に向けられた。

「オッサン……オレはまだ20代だったの！ ……まあ、本当は

お前らじゃなくて返り討ちにあつガキの方が心配だから忠告してんだ。あれでもオレのカワイイ……」

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねーぞ！ コラッ！」

青空に、バキッという音が響いた。

第4章・羽ばたき（後書き）

唾倉浪才に関しては【針葉の花】に説明があります。また、この名前は今後のシリーズでも登場する予定です。

第5章・引っぱり

「せめて合同でもいいから練習させてくれないかな」

「だめよ。ソフトと野球じゃ全然違うわよ」

才輝はダメ元で再び美春に交渉するが、結果は芳しくない。時間だけが過ぎて行き、5時の鐘が鳴り響いた。

「ねえー、ミ八ちゃん。少しぐらいいいんじゃないの？」

ソフト部の女子が会話に入ってくる。才輝の顔をチラチラと見ていることから、その意図が簡単に読み取れる。

「ここでアイツを甘やかしたら、いつまでたっても解決しないでしょ」

「……………ミ八ちゃん、お母さんみたい……………」

この調子では、今日も練習はできそうにない。

「ハア……………」

才輝がため息をつく……………。

「おっい、才輝くん！」

同じ野球クラブの生徒が息を切らせて走ってくる。

「どうした？」

「……ゼエ、ゼエ、孝太郎君が、さっき……学校の外に、出て行った……」

「……あきらめたのか……？」

ううん、と、頭を横に振る。

「スゴク……怒ってた。もうガマンできないって……」

「なんだって……!？」

孝太郎は、単身でケンカに行ったのだと言う。

「バカ……孝太郎。クソッ！」

才輝は孝太郎を追うため、校門へ走り出した。

「俺は絶対、野球選手になるんだ！ 中学生なんか怖がってたなら、いつまでたっても遠藤選手みたいなスターになれない！」

孝太郎は公園のグラウンドへとまっすぐに向かって行く。その手は固く握りしめられている。

「やっつけてやる……! 一人で……! 先生も才輝も必要ない！」

小学生の足は速い。あっという間にグラウンドに辿り着き、そして見た。

「せ、先生!？」

グラウンドの中央、ピッチャーマウンドの上で有田が中学生たちに囲まれて倒れている。

その顔はアザだらけになっており、口が切れて血が滲んでいた。

「ほら……ミロ……。来ちまったじゃねえか」

かすれた声で有田が中学生たちに声をかける。

「あいつ、キレってから……なにすらかわからねーぞ……」

言いきる前に、孝太郎がマウンドに突っ込んで来た。

「おっとおー!」

長身の生徒が孝太郎を捕まえて持ち上げる。

「放せ、はなせよおー!」

「なー、コイツどつする?」

長身が仲間を振り返る。

「そこらへんに捨てておけばあ?」

「ゴミ袋に詰めとくか」

「ギャハハ！ それいい！」

金髪が高く笑う。と、その足を有田がつかむ。

「おい……」

低く、重みのある声だ。

「そいつに手え出すな。俺の生徒だ」

「あ？ てめえ教師だったのかよ！ 丁度いい！」

手を振り払って叫ぶ。

「先公なんざクソくらえだ！ 下らねえ説教ばかりしやがって！」

自由になった足が、有田の顔面を襲う。

「が……っ！」

顔がゆがみ、鼻血が出る。今度は別の男が、有田の背を踏みつける。

「おい、俺にもやらせろよ」

長身が言った時、その腹に重いものがぶつかった。

「やめろおおおおおー！」

孝太郎だ。孝太郎は泣きじゃくりながら、手足をバタつかせている。

「い、つて……」

長身がうずくまり、孝太郎は腕から逃れる。

「先生を、先生を蹴るなあ！」

「うつせえぞ、このガキ」

振り向いた金髪に、全力でタツクルをかます。

「うげっ！」

金髪は一瞬ひるむが、すぐに体勢を立て直して孝太郎を地面に押しさえつける。

「先生は、そいつは……イイカゲンだけど、メチャクチャだけど……
…！俺たちの大事な先生なんだよ！」

顔を土で汚しながら、なおも孝太郎は叫ぶ。

「先生は他の大人とは違うんだ！おまえたちなんか……勝手に……
…バカにすんな！」

「黙れ、クソガキ！」

「俺は……あんなに先生のこと嫌ってたのに……役に立たないって

言ったのに……先生は、俺のために来てくれてるんだ……！　こんな、こんな人を……お前たちなんか……！」

涙と土でぐしゃぐしゃになった顔が、残りの中学生たちを強く睨みつける。

「孝太郎……」

有田が、ゆっくりと起き上がる。

「カッコいいぞ。今のお前、遠藤選手よりも、ずっと……」

「てめえ！　まだやんのか!？」

一人が叫んだとき、別の声が遠くから聞こえてきた。

「孝太郎！　先生！」

「才輝……っ!？」

才輝だけではなかった。野球クラブのメンバー、そして美春までもが一緒に来ていた。

「先生！」

美春が有田と孝太郎を見つけて駆け寄ろうとする。

「おい、どうする。面倒なことになったぞ」

突然の小学生の集団に驚き、金髪が仲間いきく。

「……大勢に顔を覚えられたら厄介だ」

一つの結論に達し、中学生たちは一斉に逃げだす。

「待て！ この野郎！」

追いかけてよとする孝太郎の肩を、誰かがつかんだ。

「さすが未来の大リーガー。凄まじい気迫だったぜ」

有田がニヤリと笑うのを、孝太郎は滲んだ目で見た。

第5章・引っ張り（後書き）

タイトルの「引っ張り」とは、鳥の鳴き方の名称で「急速な集合を促す」声のことです。

エピソード・天、高く、鳴き笑う鳥

「遅くなってゴメン。ミハちゃん、今どうなってんの？」

ソフト部の女子が美春に声をかける。

「9回のウラ、1-2で負けてるから、ここで逆転できなきゃ敗北決定。2アウトでランナー2・3塁」

「バッターは？」

「……神代君」

「やった！ 見に来た甲斐があつた」

(……試合に勝ってからいいなさいよ、せめて)

2塁ランナーは孝太郎だった。

才輝ならまず打てる。しかし、次のバッターはアテにできない。この打席で孝太郎が帰るしか逆転の道はない。

「頼むぞー、才輝ー！」

「神代くん、頑張つてー！」

声援を背に、才輝はバッターボックスに立つ。

第1球、才輝は見逃す。

「ストライク！」

審判が声を張り上げる。

歓喜と落胆の音がグラウンドに響く。

才輝は一塁側のフェンスの向こうを見る。そこには有田が座っていた。

「しつかりやれよー！ 才輝イ！」

視線に気付いて声援を送ってくる。

「女の子が見てる前で恥かくなよー！ ツーか羨ましいぞー、コノヤローっ！」

どんな応援だ。有田の隣に座っているスーツ姿の男もクスクスと笑っている。

視線をピッチャーに戻し、才輝はフォームを構える。

第2球……。

「ストライク！ ツー！」

緊迫した空気が一瞬緩み、またすぐに張り詰める。……追い詰められた。

「才輝ー！ 打てる、お前なら打てるぞー！」

孝太郎の激励に、才輝はうなずく。

そして第3球……。

カキーン！

「行ったあ！ レフトだ！」

白球が放物線を描きながら飛び、外野手の後ろに落ちる。

「ホームイン！ 同点！」

レフトがボールを拾った時、3塁にいたランナーはすでにホームベースを踏んでいた。

「行け！ 孝太郎！ ここで追い越せ！」

才輝が叫び、孝太郎が3塁を蹴る。それを見て、レフトから中継へ球が投げられる。

「間に合え！」

中継からバックホームの鋭い返球。タイミングはきわどい。

有田が立ち上がり、目一杯声を張り上げる。

「とべえええええええ！ 孝太郎！」

キャッチャーが球を受けると同時に、孝太郎の体がホームに滑り

込む。

「どっちだ……っ？」

有田がつぶやく。隣の男も、いや、観客のほとんどが呼吸するの
も忘れて審判の声を待っている。

一瞬の沈黙の後、高らかに審判が宣言する。

「セーフ！ セーフ！」

ワアアア！と、味方のベンチが湧く。

再び土で汚れた顔は、笑っていた。その視線の先にいる男も。逆
転を決めたバッターも。

夢を追いかける少年は、今、確かに飛んだ。

ここで、この物語に幕を下ろそう。まだまだ彼らの成長していく
姿を追っていききたいところだが、それはまた別の機会に。

……ドラマを生み出してくれるのは、彼らだけではない。この町
には多くの人間が存在し、そして人の出会いの数だけドラマがある。
また、新しい話を聞きたくなったら、私のところに来なさい。いつ
でも歓迎しよう。

……私の名前は魅月町。また、会う日まで。ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459d/>

魅月町・夢想の鳥

2010年10月10日05時52分発行